保健体育

Health and Physical Education

「対話的な学び」を具現する授業デザイン例

福島県教育庁相双教育事務所

▶ 学年　中学校　第3学年

▶ 単元　球技　ネット型（バレーボール）

POINT 01 対話的な学びを引き出す教師の仕掛け

本単元は、仲間と連携した一連の流れで攻撃を組み立てるため、自己や仲間の課題を見付ける学習活動を通して、自己の意見を伝えたり仲間の意見を聞いたりして練習の方法を工夫し、課題を解決することをねらいの一つとしている。単元の導入において、教師は生徒たちと前学年までの学習を振り返り、バレーボールをどのように楽しみたいかと問いかけた。生徒たちからは、もっとスパイクを打って得点を決めたいという意見が多く挙げられた。そこで教師は、このような子どもたちの思いを生かし、「拾う、つなぐ、打つ」という一連の流れの中でプレイすることを目標とし、生徒と共有した。

本時では、目標を達成するための課題の発見と、その課題の解決方法について、グループごとに話し合ったり試したりする。以下はグループの話し合いの様子である。

POINT 02 対話的な学びの様子

◎　課題解決に向けてグループごとに練習方法を工夫して試す。

教師「ボールをつなげてスパイクを打つためのみなさんの課題は何ですか。」

（タブレット PC で撮影したゲームの動画も確認しながら話合う）

生徒 B「**ボールをつなぐことはできてきたけど、スパイクを打てるような場面がないね。**」

生徒 C「スパイクを打ちやすいように狙ってトスを上げるのって難しいよね。」

生徒 A「私たちのグループは、スパイクにつながるトスを上げることが課題だね。」

教師「グループで見つけた課題を解決できるように、練習の方法を工夫して試してみましょう。」

生徒 B「狙ったところにトスを上げるためには、**ボールの落下点にすばやく入ることが大事だと思うよ。**」

生徒 C「なるほど…。」

生徒 A「**B さんの言うように、すばやく入ることができればトスを上げる準備ができるから、狙ったところに上げやすくなるかも。**」

（ポジションを決め、相手コートからチャンスボールを入れる形で練習をする）

生徒 B「ボールはキャッチしてもいいことにして、まずはボールの落下点に素早く入れるように練習をしてみよう。」

生徒 A「**落下点を予測して動くといいと思うよ。**」

生徒 C「よし！みんなでやってみよう。」

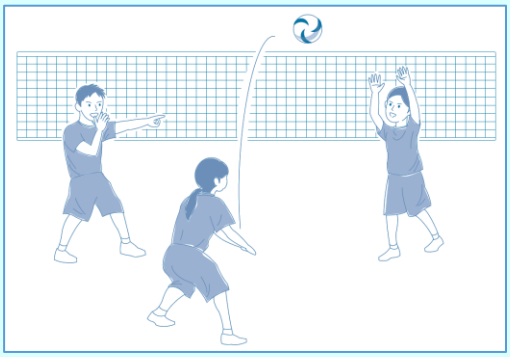
（しばらく練習は続く）

生徒 A「スパイクしやすいトスが上げられるようになってきたね。」

生徒 B「今のプレイはスパイクまでスムーズにつながって良かったよね。」

生徒 C「**ボールの下に入れるようになったら、トスを出す方向も見えてきたかも…。**」

教師「ボールの落下点に素早く入ることで、スムーズにトスが上がるようになりましたね。」



生徒 C「**キャッチをせずにオーバーハンドパスでもトスを上げてみようかな…。**」

（グループ練習はさらに続く）

『授業改善グランドデザイン』との関連

生徒の「こうしたい」「こうなりたい」という思いを引き出すことが大切である。自ら課題を見付け、練習方法を仲間と協力して考え工夫することで、学び合いにつなげる。

POINT 03 学びが深まった生徒の姿

この授業では、チームとして目指すバレーボールの楽しみ方が明確になったことで、本単元のねらいである練習の方法を工夫したり互いに助け合い教え合おうとしたりすることができた。また、一人一人が技能の程度に応じたプレイの仕方を工夫することで、どの生徒も「バレーボール」を楽しむことができた。

また、本時において生徒 C がキャッチからトスの練習を始めたように、教師は一人一人の体力や技能の程度、性別や障がい等にかかわらず、運動の多様な楽しさを味わうことができるようにするため、指導方法を工夫することが大切である。